書評

吉田ゆか子著『バリ島仮面舞踊劇の人類学――人とモノが織りなす芸能』

竹　村　嘉　晃

インドネシアのバリ島は，神々に捧げる奉納芸から娯楽性がある観光客向けの舞踊劇まで，数多くの芸能が伝承されている。観光地として人気の高いこの島には，年間20万人以上の日本人観光客が訪れており，バリ舞踊やガムラン音楽を習う目的で長期滞在する者も少なくない。近年では，日本国内のあちらこちらで日本人によるバリ舞踊の教室や公演が開かれるほど，われわれがバリの芸能を目にする機会も増えている。

こうしたなかで，本書は，バリ人の生活や信仰の中心を占めているバリ・ヒンドゥー教の儀礼的プロセスとして，祭儀の場で奉納される仮面舞踊劇のトペン・ワリを扱っている点が大いに注目されよう。ただし，本書の目的は，トペンの技芸そのものを描くことにあるのではない。むしろ，長期にわたる綿密なフィールド調査での経験をもとに，先行研究がトペン演者たちの繰り広げる話芸を，完成度の高い「名人芸」として画一的に捉えてきたことに対する疑問から，本書の問題意識は展開される。もちろん，トペンが上演される祭儀空間について述べてはいるが，トペンという仮面パフォーマンスを著名な演者による卓越した技芸として枠づけるのではなく，この祭儀に関わる様々なエージェント，すなわち「他の人やモノの働きを媒介しながら働く行為体」（p.27）とのやり取りによって立ち上がる場として捉え直している点に本書の特色がある。

本書が展開する方法論の理論的背景にあるのは，モノ研究と芸能の人類学である。これまでの西欧近代的な認識においては，人間だけが主体として特権化され，物は客体として位置づけられてきたが，1980年代以降の人類学的なモノ研究では，それまで通念的に流布してきた人間中心的な世界観や認識論を超えて，人間の「モノ」との関係性を新たな視点から切り開こうとしている。著書は，こうした動向とそれに多大な影響を与えた人類学者A. ジェルが提唱した芸術の人類学の視点に基づき，トペンをモノと人間たちとの相互的なやりとりのなかで織りなされるネクサス（連結，結合，連関）として位置づけている。そして，トペンと観客の関係やトペンという仮面の働き，さらには演者の実践活動とその発展過程における多様なエージェントのはたらきに注目しながら，芸能の人類学の新たな可能性を提唱している。

本書は，著者が2012年に筑波大学大学院人文社会科学研究科に提出した博士学位論文を加筆・修正したものである。序章に続く６つの章と終章で構成されており，第１，２章は演者と観客との間のネクサスに焦点をあて，第３，４章では，仮面という物の特性に着目しながら人とモノとの相互的なやりとりのなかで織りなされるネクサスとしてトペンを問い直し，第５，６章では，「ローカル」な名も無き演者が多様なエージェントとの関わりのなかで成長していく過程を論じている。以下，各章における問題意識と論じられた観点について触れていく。

第１章「トペンの上演形式――儀礼と余興の間の連続性と非連続」では，トペンの多様なジャンルと形式を説明したうえで，儀礼的機能と余興としての機能の両方を併せ持つトペン・ワリの特徴について，演者と観客との関係性の相違から考察している。そこでは，時，場所，状況に応じて柔軟に行為することをよしとする「デザ・カラ・パトラ」というバリ人の観念を紹介しながら，トペンの形式が上演を規定し制限するのではなく，トペン演者と共演者の力量，上演依頼者の意図や観客の要望，あるいは会場の諸条件などの相互交渉のなかから，上演形式が即興的かつ柔軟に生み出されている祭儀空間を描き出している。

第２章「トペン・ワリと『観客』――鑑賞の断片性と反復性」では，「観られる者」と「観る者」の間柄，すなわち従来の芸能研究が論じてきた芸能と儀礼を区分する「観る／観られる」という関係性では還元できない，トペン・ワリと観客との複雑かつ多重な関係性が検討されている。そこでは，トペン・ワリの観客が単に上演を「観に来た客」ではなく，演者とともに儀礼の成功に尽力する儀礼の主催者や参加者の一員であることが指摘され，彼らが儀礼の成功のために奉納芸能であるトペン・ワリを必要とする一方で，その上演に対しては断片的かつ関心と無関心が交錯した振る舞いをみせていることを明かし，上演と観客の間で結ばれる多義的なエージェントとペーシェントの関係を論じている。

第３，４章は，仮面という「モノ」とそれを取り巻く人やモノが織りなす出来事を分析の中心に据えた本書の核となる部分である。トペンに関する先行研究が話芸を中心に分析してきたなかで，第３章「仮の面と仮の胴――上演中の人・モノ・人格」では，トペン上演者や伴奏者あるいは

観客といった「人」と，仮面や衣装，供物や伴奏楽器，さらには音などの多様な「モノ」とが相互作用する上演の場をネクサスと位置づけ，仮面というモノが人との関わりのなかでいかなる働きをしているのか，また仮面の物性がトペンにおける仮面の働きにいかに作用しているのか，さらにはパフォーマンスの技芸とその伝承にいかなる影響を与えているのかを考察している。そこでは，人とモノの間の主－客の関係が入れ替わり，ときにはその関係性だけでは捉えることができない，人とモノのやりとりが生き生きと展開するトペン上演の動態が明らかになる。

第４章「もうひとつの人・モノ・神格のネクサス――上演前後に続く仮面をめぐるやりとり」では，仮面の「物としての性質」，すなわち著者が言うところの「物性」が，トペンにおける仮面の働きにいかなる作用を及ぼしているのか，また演者の身体を介して顕在化される芸能が，物性を有する仮面を介在することでいかなる影響を与えているのかを考察している。そこでは，生成されたトペンの仮面が上演での反覆使用や儀礼の施しといった仮面と人との相互作用を通じて，その魅力や霊的な力を蓄積していくなかで，仮面それ自体や人びととの関係性，さらには演者の実践内容に変化が生じている位相が明示される。そして，仮面と人びととの関わりについての問題意識を日常の生活世界にまで拡げ，トペン上演の場以外でも持続される仮面と演者，そしてその他の人やモノが織りなす関係の総体をもう一つのネクサスと位置づけ，その動態を論じている。

第５章「演者が生まれるプロセス――『プロフェッショナル』から『ローカル』まで」では，演者が誕生する過程，すなわち人がトペン演者となることへの動機づけや技芸の習得，演者としての実践活動とそれに対する周囲からの認定といった一連のプロセスを取り上げている。そこでは，先行研究が演者の師弟関係や舞踊的身体技法の訓練のみを扱っているのに対して，演者はもとよりいかなるエージェントが技芸習得のプロセスに関わっているのか，その働きに注目しながら考察している。そして，高い専門性を有する「プロフェッショナル」な演者から，地縁や血縁などの人脈を頼りに限定された範囲内で実践活動を展開する名も無き「ローカル」な者まで，演者の質と量に大きな変化が見られるようになった今日的状況について，儀礼規模の拡大や近代的な教育機関の参入といった社会的要因を指摘し，演者を取り巻くネクサスがダイナミックに変動している実態を明らかにしている。

第６章「トペンと女性――不整合性を超えて」では，第5章で触れた演者層の拡大現象のなかでも，とくに20世紀終わりに誕生した女性のトペン演者に焦点をあてている。トペンは，舞踊，語り，歌，登場人物，さらには儀礼上の機能的側面において，バリ人男性に期待される社会的役割や男性のジェンダー・イメージと深く結びついている。そのため，近年まで男性の活動領域として認識されており，女性には縁遠いものであった。ここでは，女性トペン演者の実践について，先行研究が女性の地位向上や権利を求める活動であると指摘したことに同調するのではなく，彼女たちの活動に関わったエージェントたちの働きに注目しながら，トペンの技芸を習得した彼女たちの経験過程を明らかにし，一瞥したところ相反するトペンと女性の取り合わせが，多様なニュアンスを帯ながら結びついている動態を描き出している。

本書は全体を通して，フィールドでの詳細な事例に基づきながら，バリ島の仮面舞踊劇であるトペン・ワリについて，巧みな話術を駆使した演者による「名人芸」としてその技芸を中心に論じるのではなく，上演中やそれ以外の文脈でトペンに関わる様々なエージェントが交錯するネクサスとして捉え直し，今日における演者や様式の多様化，いいかえれば即興的で可変的かつ多義的でもあるトペン上演の新たな側面を照射している。終章においては，これまでの議論をまとめ，改めて問題意識を共有している。

以上，本書の内容をかいつまんで紹介してきたが，本書の優れた点は，演劇パフォーマンスにおける「モノ」を扱う，すなわちモノのエージェンシーを分析対象としたこと，そして先行研究が論じた「著名な」演者の技量を分析の中心に据えた方法論から脱却し，演者や観客だけでなく，仮面自体やそれを製作した職人，ガムラン伴奏者や司祭といったそれ以外のエージェンシーをも議論の俎上にのせ，トペンを取り巻く人びとの生活世界や上演の場を生み出す地域社会をも描写したことにある。また，トペンをローカルで伝統的な「民族芸能」という鳥籠に閉じ込めたり，仮面の意味やその神性の議論に還元したりもせず，その「物性」がいかに多様なレベルでトペンの技芸や伝承に作用しているのかを論じ，同時にバリ社会やインドネシア国家の社会政治的状況，さらにはグローバル化の影響に位置づけながら分析しているのも本書の魅力を高めている要因といえよう。これらは，十分なフィールド調査なくしては描くことができない位相であり，本格的なインドネシア・バリ社会論としても本書を評価できる所以である。

舞踊や芸能などの演劇パフォーマンスは歴史的な産物であり，それらが伝承されている国や地域ごとに様式や身体技法にさまざまな相違がみられる。それだけでなく，その伝承過程には偶発的な出来事が含まれ，その実践は実践者の個性が反映され，かつ社会的環境への適応の結果として実践

の場に現れるものである。だからといって，演劇パフォーマンスを規定する諸条件との関係において，それらの実践を記述しても，結局のところは実践を演じる身体にまつわる，いうなれば個の領域に対する関心に問題が帰される。本書が提唱したモノの物性に着目して芸能を捉え直す方法論は，当該社会における機能や構造，芸態や歴史などに焦点をあてた従来の手法が取りこぼしてきた位相，すなわち個の領域における人とモノとの相互作用や関係性を映し出す新たな視点をもたらし，バリ以外の事例にも応用可能な方法論として期待できよう。

バリ社会における仮面や芸能そのものに対する審美眼，あるいは身体観に関する議論が断片的にとどまっている点や，ジェルのエージェンシーとネクサスの議論が無批判のままトペンの事例に当てはめられている印象を拭えない点などは未消化であり，いくつかの難点はある。とはいえ，本書がトペン研究やバリの芸能論をこえた学際的な領域に議論の場を拡げたことは大きな貢献であり，今後の研究にも大いに期待させる骨太の著作である。（風響社，2016年刊行）